

### 【学位論文審査の要旨】

本学位論文は、難治性てんかんを持つ人々の健康 - 病気の認識の実態、その認識の程度と行動の特徴、さらに健康 - 病気認識の変化とそれに関連する要因を理解し記述することを目的としている。本研究は、質的研究手法を用いて当事者の視点からてんかんという病気の認識の複雑性を探求した初めての研究であり、研究の意義と新奇性は極めて高いといえる。

難治性てんかんと診断された 15 名の参加者は snowball sampling で抽出され、平均年齢は 35.5 (SD7.57) であった。半構成面接法を用いたインタビューデータは、Knafli & Webster(1998)および Miles & Huberman(1994)の分析方法で段階的に丁寧に分析されていると高く評価できる。研究方法における新たな試みとしては、健康 - 病気認識の変化をトライアングレーションの手法を用いてビジュアルアナログスケール(VAS)を用いた量的データから質的データ分析の妥当性を高めている点も評価に値すると考える。

その他、本研究から得られた新たな知見と独創性は以下のとおりである。

1. 難治性てんかんを持つ人の「健康」と「病気」の概念を、「健康 - 病気」という現象を表す新たな概念として提示したことが評価できる。患者にとっての健康とは、てんかん発作のない状態（普通であること）、服薬が無い状態、偏見が無い状態などと認識され、病気とはてんかんの疾患に関する知識や発作そのものであると認識していることが示された。さらにこれらの認識は、それぞれ独立した認識ではなく、患者の日常生活において常に混在し、様々な出来事の中でバランスをとっている複雑な現象であることが示された。
2. 上記の「健康 - 病気」の認識には、強弱という程度があり、日常生活および病気の経過の中で変化するものであることを示したことは看護実践への示唆に富むもので意義は高いと評価できる。参加者の健康 - 病気の認識の強弱に関連する要因としては、症状の自覚、偏見、役割、病気の捉え方、気持ちの状態が示され、それらの強弱によって患者がてんかんをほとんど認識せず健康の認識が強いグループ、健康の認識とてんかんの認識の程度が等しいグループ、てんかんの認識が強く健康の認識が弱いグループ、てんかんの認識が非常に強く健康を認識していないグループの 4 グループに分類される可能性を示唆した。また認識の変化に関連する要因としては、日常生活では、「内服」、「仕事」、「普段の生活」、初めての発作から現在までの過程では、「手術」、「初めての発作」が示された。

本研究は、量的研究では明らかにし得ないてんかん発作の多彩な症状、てんかん発作の生活への影響力、その発作を予測することの難しさ、てんかんという病気に対する患者自身の認識の仕方の特徴、またてんかんを持って生きることの患者の成長・発達や社会生活に及ぼす影響の大きさなどを明らかにした。これらは、難治性てんかんを持って生きる患者の病気に対する認識を医療者が単に認識が低い、認識が欠如していると評価することの危険性を示唆するとともにこの疾患を持って生きる患者に対する看護者の共感的理解を

## 博士学位論文審査の要旨

促進するものといえる。さらに研究結果は、難治性てんかん患者に対するアセスメントの視点および適切な看護介入方法を発見する手がかりとして看護実践および研究、教育の質向上に貢献するものといえる。また本研究の結果は、難治性てんかん患者のみならずてんかん患者全体への看護にも適用される可能性を含んでいることが評価できる。

審査では、てんかんを持つ人の「健康 - 病気」の概念の捉え方、研究の意義と新奇性、分析方法の確認と妥当性、研究結果の看護科学および看護実践への貢献のあり方、今後の研究の方向性等について質疑が行われ、概ね妥当な回答が得られた。また、指摘された事項については理解し、修正する能力を持ち合わせていることが確認された。さらに、今後の課題についても真摯に受け止め、積極的に対応する姿勢がみられた。

以上により、本申請論文は博士学位論文に値し、申請者は博士（看護学）の学位に相当する学識と研究能力を有するものと判断する。